

レディング大学留学記

Reading Dickens in Reading

渡部 智也

Tomoya WATANABE



2009年9月から1年間、イングランド南部バークシャー州にあるレディング大学（University of Reading）で学ぶ幸運に恵まれた。『ディケンズフェロウシップ日本支部年報』においてはこれまで、多くの方々がイギリス留学記を執筆されてきたが、レディングに行かれたという方はおられなかったように思う。私自身、行く前はレディングという街と大学のことをほとんど知らなかったのであるが、1年間ここで勉強してみて、この場所がディケンズを中心とした英文学を研究するうえで非常に良い環境であることを強く感じた。幸いなことに、『マーティン・チャズルウィット』の「エデン」とは異なり、行き着いた先は不毛な土地ではなく、肥沃な大地だったのである。この留学記が、他の会員の皆様、とりわけ今後イギリスへの留学を検討されている若い会員の方々の参考になれば幸いである。

私がレディングに到着したのは2009年9月15日である。フレッシュウィークが始まるのは9月28日であり、ほぼ2週間早めに現地入

りした。めでたく Unconditional offer を得、かつ準備コースなどの参加を免除された留学生の場合、多くは授業開始の前日など、まさに学期直前に現地入りする。実際、私の周りにもそのような留学生が非常に目立った。しかし、彼らの多くが口々に述べていたことは、やはり私のように2週間程度早めに現地入りした方が良かった、ということであった。というのも、まったく新しい土地で生活する場合、いかにその場所について早くよく知るかが、そこで快適な生活を送る上でのひとつの鍵になるからだ。実際私は現地到着以降、学期が始まるまでの時間を、主にレディングという街を知ることに費やした。そしてそこで得た知識はその後非常に役に立ったと思う。これから留学をされる方は、可能であるならば少し早めに現地に行かれることを強くお勧めしたい。

ここで、レディングという街について簡単に説明しておこう。上述したように、レディングはイングランド南部にある、人口15万人ほどの比較的小さな商業都市で、ロンドンの

パディントン駅から特急で約 25 分、また、街からオックスフォードへも 30 分ほどで到着できるという、非常に立地条件の良い場所である。私が通ったレディング大学は、19 世紀末にこの街に作られた大学である。

なぜ留学先としてレディング大学を選んだのか？留学前、留学中を問わず、たびたび尋ねられたことであるが、これは著名なディケンズ研究家であるマイケル・スレイター先生 (Michael Slater) に負うところが大きい。今回、私は留学するにあたり、指導教官の佐々木徹先生を介してスレイター先生にアドバイスを仰

いだ。スレイター先生は 2005 年、客員教授として京都大学に来られたのだが、そのときに私は大学院生として先生の授業に参加し、それが縁で以来、親しくさせていただいている。いくつかの候補の中から、先生が真っ先に挙げられたのがこのレディング大学であった。その理由は、レディングには古典的なディケンズ研究家のニコラ・ブラッドベリ先生 (Nicola Bradbury) がおられるから、というものであった。振り返ってみて、この助言は非常に的確であったと思う。というのも、後述するが、ブラッドベリ先生は非常に示唆に富み、論文



レディング大学構内の中心部。
それなりに緑が多い。

指導の際にはたびたび興味深いアドバイスを下さったからである。また、これはスレイター先生も気づいておられなかった点であるが、レディング大学には他に、ヴィクトリア朝の医学に強い関心を持つアンドリュー・マンガム先生 (Andrew Mangham)、夢遊病や悪夢を研究しているステイーブン・トムソン先生 (Stephen Thomson) らがおられ、ディケンズ作品における「眠り」を研究テーマとしている私にとっては非常に良い研究環境であった。

私が受講したのは MA in Nineteenth Century Literature and Culture というコースである。イギリスの大学院のシ



スレイター先生、『ディケンズ伝』刊行記念パーティーにて

ステムについては、すでに年報 29 号 (2006 年) の記事の中で、松本靖彦先生が詳細に解説してくださっているが、ここではレディング大学のシステムについて私のほうから説明させていただきたい。この講座に限らず、大学院の修士課程には、Taught programme と Research programme の 2 種類がある。前者は最初の 2 学期、1 週間に 2 コマの授業に出席し、学期末に各授業に関する 4,000 語から 5,000 語のエッセイを書く。そして最後の学期に 20,000 語程度の修士論文を執筆する。一方の Research programme は、授業などには参加せず、指導教官の指示を仰ぎながら、1 年をかけて修士論文を書くコースである。私の場合は、もともと留学は 1 年と決めていたこともあり、できる限り色々な経験ができそうな Taught programme を選択した。そして、文字通り色々な経験をすることになった。

19 世紀英文学コースの授業は、担当教員は基本的にガイド役を務めるだけで、大部分は学生による自由な議論で構成されていた。この日本とはまったく違う授業システムに、当初私は大いに戸惑った。この戸惑いは、何もシステムの違いだけに起因したものではない。授業が進むにつれて、私は嫌が応にも自身の英語力の未熟さを痛感させられることとなったのだ。私の受講した 19 世紀英文学コースは 12 名ほどの学生で構成さ

れていたのだが、私以外は1人のアメリカ留学生を除き、全員がイギリス人であった。しかも男性は私ともう1人、昨年学部を卒業したというかなり年配の方がいるだけで、学生の多くは21、2歳の非常に若い女の子ばかり。そして、授業でディスカッションとなった場合、彼女たちは必然的に、口語的な表現を駆使しながら恐ろしいほどのスピードで自分たちの意見を主張し始めた。もっとリスニングの練習をしておくべきだったと、これほど強く実感したことはない。昨今、多くの日本人は英語を「話す」ことに注意を向けがちだが、実は「話す」ためには相手の意見を「聞く」ことが不可欠であり、話す能力以上に聞く能力は絶対不可欠である。そんな当たり前の事実を強く再認識させられた。ディスカッションのみならず、授業に臨んでの準備も大変だった。日本では1冊の小説を1年かけて精読する、という類の授業に慣れていたのだが、こちらでは1回の授業で1冊ないし2冊の作品を読む。当然、1週間に要求される読書量は並大抵のものではない。先生の都合で2つの授業が同日におこなわれ、その課題図書が *Bleak House* に *Little Dorrit*、そしてスコット (Sir Walter Scott) の *Waverley* にディズレーリ (Benjamin Disraeli) の *Sybil* だった時は、いったいどうしようかと思った。が、これらの経験は、振り返ってみると非常に有意義なも

のであった。これまで、精読でゆっくりと本を読むことはあっても、これほどまでのスピードで小説を読むことはなかった。今回、授業にあわせて速読、多読を繰り返すことで、これまで見えてこなかったものが見えてきたように思う。また日本であれば、おそらく自分の研究と関連のある本を中心に読んでいたことと思うが、こちらでは関係のありそうなものからまったくなさそうなものまで、ありとあらゆるものを読むことができた。直接的な影響はなくとも、今後、この経験が生きてきそうな気がしている。ディスカッションの経験も同様である。最初はほとんど言っていることがわからず、当然のごとく議論には参加できなかったのだが、徐々に慣れていくことで、すべては理解できずとも、彼女たちの主張の要点をつかむことができるようになり、議論にもある程度参加できるようになった。やはり積極的に参加できるようになると、大変な授業でも楽しく感じられるものである。もっとも、なかなかイギリスの大学も楽しいな、と思ったころには、2学期が終わっていた。

3学期に入ると、いよいよ修士論文執筆モードへと移行する。とはいえ、この段階ではまだ他の院生の皆さんには緊張感の欠片もない。まず4月の末に、学生を含めたコース関係者全員の前で、現段階での修士論文に関するアイディアを発表し、そ

の発表を元に指導教官が決められる。そしてその後は、その指導教官と連絡を取りつつ、論文を書いていく。こちらから、どの先生の指導を受けたい、と希望するのではなく、発表を元に先生方が話し合っただけで各々の担当学生を決める、というシステムのため、希望が通るか少しはらはらしたのだが、結局は何の問題もなく、当初の予定通りブラッドベリ先生に指導教官になっていただくことができた。他の学生もおおよそ希望していた指導教官の指導を受けられたようで、自分で選べないという点を除けば問題のないシステムのようなのだ。この後は大体3週間に1度のペースで先生と面談しながら、各段階でのアイデア、および論文の構成について話し合った。幸いなことにブラッドベリ先生はほぼ全面的に私の考えを支持して下さり、また適宜よいアドバイスを下さったので、論文執筆は比較的すんなりと進んだ。興味深いのは、過去留学された方々の紀行文を読んでいると、たとえば面談のたびに何千語のドラフトを提出してアドバイスを受ける、といったような、非常にきめ細かい指導を受けているのを度々目にしていたのだが、レディング大学ではそのような細かい一律の指導がなかったことである。すべては各指導教官の裁量にゆだねられており、そのように毎面談ごとにドラフトの提出を求める先生もいれば、基本的に学生が書いたものは

読まないという先生もいたようだ。ブラッドベリ先生の場合、面談時に書いたものを見て下さることはなかったのだが、8月に論文が仕上がった段階で、1度目を通していただけないかとお願いしたところ、快く最後まで読んでくださった。執筆中は当然悩むことも色々あったが、先生のおかげもあって、全体としては非常にスムーズに進んだように思う。

指導教官以外の研究環境についても書かせていただこう。まず図書館であるが、それなりに必要な本は揃っていた。が、なぜこの本がないのか、と思わされることも多々あり、お世辞にも優れているとは言いがたかった。もっとも、オックスフォード大学など大図書館を抱えた大学を除き、イギリスの大学図書館の蔵書数に満足した、という声はあまり聞かないので、この不満はイギリスの多くの大学に当てはまることかもしれない。ただし、日本の大学図書館と比べると、圧倒的と言えるほどオンライン資料は充実していた。ディケンズ関連で言えば、たとえば *Household Words* や *All the Year Round* はすべてオンラインで読むことができ、寮の部屋でダウンロードしたり印刷したりすることも可能であった。また既に述べたように、レディングは公共交通機関のアクセスが非常に良いので、必要な本が大学の図書館になかった場合でも、ロンドンの大英図書館やオックスフォードのボドリアン

図書館などの大型図書館に、さほど時間をかけずに行くことが可能であった。この点はこの大学で研究する上での大きな利点と言えるだろう。ただし、それ以外の面ではあまり環境が良いとは言えない。たとえば図書館など、大学に設置してある共有パソコンの数は非常に少ない。そのため、エッセイの提出時期になると常に大学のパソコンルームはいっぱいで、席を探すのが大変になる。学生は自前のパソコンを持ってくるのが必須になる。また全てのプリンターが大学院生を含めて有料（1枚につき5ペンス）だったのも地味に痛かった。日本の大学院であれば、院生は300枚まで無料など、少し便



ディケンズ博物館前にて。
撮影者スレイター先生

宜を図ってもらえるケースが多いと思うが、こちらでは（少なくともレディングでは）そのようなシステムはないらしい。おかげで修士論文を執筆するに当たっては、*Dickensian*などの論文をコピーするのに相当量のお金をつぎ込む羽目になった。聞くとところではPhDコースの学生はまた違うようだが、全体にサービスは日本のほうが良いように感じた。

一方で、生活環境は非常に良かった。私は1フロア8人で1キッチンを共有するタイプの寮で生活していたのだが（部屋は個室）、周りの学生は全員大学院生ということもあってか、比較的雰囲気も落ち着いており、一切の問題なく生活することができた。とりわけ私が生活したフロアは、今年最高のメンバーが揃ったと言われ、そのキッチンの使い方の美しさは、毎週掃除にやってくるクリーナーさえ認めるほどであった。仲もよく、このメンバーで買い物に行ったり、ケンブリッジを旅行したのは非常に良い思い出である。

留学中は様々なディケンジアンに助けていただいた。とりわけ良くして下さったのは、やはりスレイター先生である。会員の皆様方は既によくご存知のことと思うが、スレイター先生は昨年、イエール大学から新しいディケンズ伝を刊行された。そして9月にはロンドン大学でその出版記念パーティーが行われたのだが、光栄なことに先生はそこに私までも

招待して下さった。この会場で佐々木先生にお会いすることができたほか、マルコム・アンドリュース先生 (Malcolm Andrews)、ポール・シュリック先生 (Paul Schlicke)、バーバラ・ハーディー先生 (Barbara Hardy) といった著名なディケンジアンの方々に初めてお会いし、お話しさせていただくことができたのは非常に良い思い出である。ハーディー先生に、「横顔が若いころのディケンズに似ている。Good start だ。」と言われたことを今後の励みにしたいと思う。スレイター先生は他にもクリスマスの時期にディケンズ博物館を案内してくださった上、自身が内輪のメンバーに対して行っている『クリスマス・キャロル』の朗読にご招待くださった。他にも実に3度にわたってロンドンで行われた先生の講演にご招待いただき、貴重なお話を聞く機会を与えてくださった。さらに先生は旧知のトニー・ポイントン先生 (Tony Pointon)、セルマ・グロブ女史 (Thelma Grove) にお願いして、私にディケンズゆかりの地をめぐる機会まで作ってくださった。先生方のおかげで、ポーツマスとロチェスターを満喫することができた。本当に、感謝の気持ちでいっぱいである。

せっかく本場イギリスにいるのだから、というので、7月末には初めて、ディケンズフェロウシップの国際大会にも2日間だけではあるが参加させていただいた。どうやら今回の大

会の運営には色々と問題があったようで、この会に参加するまでもひと悶着あったのだが、トニー・ウィリアムス先生 (Tony Williams) の御尽力により、無事参加することができた。前々から、本場のディケンズフェロウシップは非常にフレンドリーで、学術団体というよりまさに愛好家の集まりだ、という話を聞かされていたのだが、遠足あり、晚餐あり、お楽しみあり、と、なるほど、噂は本当だったのだな、と実感させられた。大会では、日本支部会員の新井先生、宮丸先生とも久々にお会いすることができ、非常に充実した2日間を過ごすことができた。

こうして自身の留学生生活を振り返りながら感じるのは、いかに私が多くの方々に支えられてきたか、ということである。これまでに名前を挙げたディケンジアンの方々のみならず、留学中は様々な方に助けていただいた。その中でも、日本の家族、友人、そして先生方もさることながら、イギリスで1年をともに過ごした仲間たちの存在を忘れてはならないと思う。私の場合、これまで日本ではさほど大きな病気にかかることはなかったのであるが、渡英以降、5度ほど38度強の熱を出して寝込んでしまった。授業開始間もない10月には新型インフルエンザにかかり、1週間自室軟禁状態になったこともあった。そのような時に支えてくれたのが、同じ寮に暮らす友人たちであ

った。彼女たちは（というのも、大学の講座だけでなく、寮でも男性は私を含めて2人だけだった）、自分たち自身も授業で忙しい時期であろうに、毎日のように食事や必要なものを持ってきてくれた上、私が回復して部屋を出られるようになると、我が事のように喜んでくれた。肉体的、精神的に厳しい海外生活を文字通り

「生き抜く」ことができたのは、そんな友人たちのおかげと言っても過言ではない。『骨董屋』のディック・スウィヴェラーが、自身を看病してくれた侯爵夫人への恩を忘れなかったのと同様に、私も支えてくれた方々への感謝の気持ちを忘れずに、日々精進していきたいと強く思う。



大学寮にて友人たちと